



# JETプログラム 海外巡回活動

(財)自治体国際化協会業務部

## 1 JETプログラム海外巡回について

CLAIR業務部では、例年、JETプログラム参加者の募集時期に合わせ、職員がJET招致国の在外公館や大学等を訪問している。

在外公館への訪問においては、今期のあつせん配置結果や公館が送り出した参加者の日本における活躍ぶりなど受入れ状況等について伝達するとともに、来期の募集要綱の改正点等について説明を行うことで、公館担当者とCLAIR担当者の意思疎通を図り、JETプログラムを円滑に運営することを目的としている。

また、大学等への訪問においては、より一層、優秀な応募者の確保を図るため、学生に対してJETプログラムについて説明するほか、日本語学科教授や就職部の担当者等の大学関係者との意見交換を行っている。

それ以外にも、元JETプログラム参加者との意見交換会などの機会を利用し、今後のJETプログラムの改善に役立てるべく、さまざまな意見や情報等の収集・集約を行うこととしている。

今年度の海外巡回活動の概要については、以下のとおり。

## 2 今年度の訪問国等について

今年度は、九月二六日から一月一〇日にかけて、業務部職員ら二四名が八コースに分かれ、それぞれ一〇日から一三日間の日程でアメリカ・カナダ・イギリス・フランス・アイルランド・オーストラリア・ニュージーランド及び今回初めてシンガポールを訪問した。八月に来日した新規JET参加者たちが着任しておよそ二カ月が過ぎ、徐々に落ち着きを見せ始めた頃、海外巡回の第一陣が出發する。今年度はカナダ東部及びポスト

ンへのグループの出發を皮切りに、バンクーバー、ポートランドを訪問する最終のグループが帰国するまで、およそ二カ月半の間、いずれかのグループが海外巡回活動に従事していたことになる。この時期は、来期のJET募集も間近であることに加え、多くのJET参加者の出身地となる欧米圏では夏



↑シンガポール国立大学での説明会



↑ポートランド州立大学での説明会



↑ダブリンシティ大学(アイルランド)での説明会

期休暇が終わり、学生たちが皆キャンパスに戻り卒業後の進路を考える季節でもあるため、貴重な広報シーズンとなる。

全コース合わせて二四カ所の在外公館を訪問するとともに、在外公館や大学などが主催するJETプログラム募集説明会においては一八カ所で当プログラムのPRを行った。

### 3 活動内容等について

#### (1) 在外公館での活動

在外公館では、第一九期JETプログラムの概要について、主に改正点を中心に説明した。一八期からの主な改正点は、補欠

合格者の繰り上げ期日について、九月三〇日まで期間を延長した点(現状は、八月三一日まで)である。これは従来から、少数ではあるが早期退職者の発生により、契約団体や学校現場から補充要望が寄せられていたため、できる限り繰り上げ期間を延長し、早期退職者の補充ができるように改正したものである。

公館担当者



↑JETプログラム広報用ポスター

との意見交換においては、あっせん配置や渡航手続き等の事務処理上の問題についてだけでなく、募集要綱の内容やJETプログラムをめぐる最近の問題点等についても踏み込んだ議論が交わされた。

契約団体が望む人物像や、CLAIRからの要望事項を公館へ伝達するとともに、公館における募集活動の最前線の状況を知ることができる貴重な機会であり、今後、JETプログラムのさらなる充実に寄与するものと思われる。

#### (2) 大学等での活動

大学等で行われた募集説明会では、主に各在外公館のJETプログラムコーディネーターと、元JET参加者でもあるCLAIR



↑クイーンズ大学(カナダ)での説明会



↑ヒューストン大学での説明会

Rのプログラムコーディネーターとが協力して、それぞれJETプログラムの概要や応募の際の注意点等について説明を行った。

彼ら自身の体験談や、JETプログラム広報ビデオの上映等を交えた説明会に、参加者は熱心に耳を傾け、最後に設けられた質疑応答時間には、多くの質問が寄せられた。

質問内容としては、応募の資格要件、あつせん配置、日本での生活、住居の問題等、実際に参加を意識した具体的なものが多くあり、確かな手ごたえが感じられるものであった。

(3) JET A A (JETプログラム同窓会) 各支部との意見交換

現在、JETプログラムを終了した元J

ET参加者は全世界で四万一〇〇〇人を超えている。そのうち、同窓会組織としてJET A Aに加入している者は約一万八〇〇〇人おり、日本と自国の国際交流促進のためにさまざまな活動を展開している。今回の募集説明会においても、多くのJET A Aにゲストスピーカーとしてご協力をいただいております。実体験に基づく彼らの説明は学生等へのアピール度が高く、説明会の成功に大きく貢献している。

訪問先の各都市では、JET A Aのメンバーと意見交換を行う機会を得た。意見交換会に参加していただいた方からは、日頃の活動状況をはじめ、今後のJETプログラムの関する提言まで、幅広い意見交換を



↑熱心に説明を聞く参加者(オースティン)

行うことができた。CLAIRでは海外事務所を通じてJET A A各支部の活動に対する各種支援を行っているが、東京本部の職員が実際に海外で活躍されているJET A Aメンバーから話を直接うかがう機会はこの海外巡回以外にはないため、彼らの活動の様子を知る意味でも貴重な機会となった。

JETとしての経験を活かし、帰国後も多方面で活躍している彼らの姿に頼もしさを感じるとともに、元参加者の視点から見たさまざまな提言は、今後のプログラム運営において非常に有意義なものであった。

#### 4 最後に

今回の海外巡回活動は、各在外公館のJET担当の方々と直接お会いして意見交換するとともに、未来のJET参加者の生の声に触れることができ、今後の改善につながる有益な情報を得る機会となった。同時に、CLAIR職員自身にとっても、通常業務の中では目にするのできない、在外公館による募集活動を実際に体験することで、JETプログラムの意義を再確認し、業務に対する自らの姿勢についてあらためて見つめ直す好機となった。

お忙しい中、今回の巡回活動に多大なご協力をいただいた在外公館をはじめとする関係の方々はこの場をお借りして深くお礼申し上げます。

# 沖縄での生活



沖縄県国際交流課国際交流員

Diana Igei de Kinjo

ディアナ・伊芸 デ 金城

沖縄は、きれいな島と青空色の海がある、本当に魅力的なところである。また観光地として知られており、観光客は年々増加し続け、一年中にぎわいを見せている。二〇〇三年には沖縄の観光客数が五〇八万人を記録した。また、沖縄はコンベンションアイランドと名付けられ、重要なイベントが行われている。二〇〇〇年サミット、五年間ごとに行われる世界のウチナーンチュ大会、二〇〇五年四月には米州開発銀行総会、Dも開催される予定である。さらに沖縄は長寿地域として世界でよく知られており、現在一〇〇歳以上のお年寄りの方々が三六五名いる。

沖縄に住んでいて、平和と自然を愛する温かい人々に囲まれて「めんそーれ」や「いちやりばちよつで」を耳にするたびに、私を含めこの素晴らしい島に住んでいる外国人の幸運について考えさせられる。私は沖縄の日系三世で、ペルーで育ちペルー人と一緒に学校で学んだ。二つのアイデンティティを持っているので、ペルー人の考え方と日系人のまじめさがよく分かっていると思う。

沖縄行きが決まった当初、私は沖縄の名字や顔を持っているので沖縄の生活に慣れるのは早いと思っていた。しかし、それらはほとんど関係がなかった。誰でもそれぞれ自分の国で生まれ育ったというアイデンティティや習慣を持っているけれども、外国に住むときはその土地の習慣を学び、生活のルールを重んじた方が周りの人たちと

早く分かり合うことができると思う。よく言われる「郷に入れば郷に従え」ということわざがぴったりである。

沖縄で生活し始めたとき、言葉の問題を除いて私が最も戸惑ったことは、ゴミの分別だった。ペルーではゴミを分別するという習慣はなく、燃えるゴミも燃えないゴミも全部一緒に捨てるため、ものを捨てるのは簡単なことであり、ゴミ問題について意識する機会はあまりなかった。そのような環境にいたので、ゴミの分別に慣れるまでにはかなりの時間を必要とした。しかし、友人や親戚の説明のおかげで、日本のゴミ問題が深刻であることが分かり、正しい分別ができるようになった。

もし、外国人が近所に引越して来たら、彼らはほかの国に住んでその習慣やルールを理解するために大変な努力をしているということを知ることがあってもいい。楽しくおしゃべりしながら、お互いの国の違いについてもっと分かると、とても驚くだろう。そして、機会があればいろんなアドバイスをしてほしい。きっと彼らは沖縄人の習慣から性格まで分かるようになり、それによって沖縄のさらなる国際化につながっていくと思う。

こういった人と人との直接的な交流から国際化が進めば、とても素晴らしいと思うのだが、実際には間接的にインターネットやテレビなどで広がっている。しかし、このような方法では沖縄の本当の「心」を十分



に伝えられないのではないかとと思う。

また、沖縄の文化についてもますます関心を持つようになった。特に、沖縄の子どもたちがエイサーに興味を持っている

ることには感心した。ペルーの子どもたちは伝統的な音楽や芸能、文化、ルーツについてあまり興味を持っていないようだが、逆に、外国から来た音楽、踊り、ファッションなどは大変人気がある。ぜひ、これからもエイサーが若い人に受け継がれてほしいと思う。

最近、外国の記者が沖縄の長寿について調べるために来沖し、沖縄の北部に住んでいるお年寄りたちのところへ訪れた。私はCIRとして案内し通訳した。九五歳から一〇三歳までのおばあさんたちと会うことができ、生活についていろいろ尋ねた。長寿の秘訣は、よく休み、よく食べるのとことだったが、さらによく話しくよく笑うことも秘訣ではないかと感じた。お年寄りの方々は幸せそうな暮らしをしていると感じた。また、自然にも囲まれ、近所の方々が家族のように面倒を見てくれるということ

だ。よく覚えているのは、明るい性格で冗談も大好きなとても魅力的な一〇三歳のおばあさんである。このような素晴らしい思い出をたくさんつくった。

ほかに気に入った仕事は、ジュニアスタディーツアー(JST)という県の国際プログラムの一つである。毎年七月に海外の県人会から選ばれた沖縄の日系高校生を、一週間沖縄へ招待する。このツアーの目的は、沖縄の高校生と交流しながら県の歴史、文化、ルーツなどを体験学習し、世界に広がるウチナンチュネットワークを肌で感じてもらうことである。そして親戚と初めて出合い、三日間のホームステイをする。私はCIRとして通訳と案内をした。

ペルーのCIRとして翻訳や学校訪問等



の仕事をしながら、豊かなペルーの文化、歴史、言語、伝統的な行事などを伝えることができたと思う。最初はこの仕事が終わるかどうか不安だったが、私の専門以外の分野で、多くの経験をすることができた。

私の能力も高めることになったし、交流員として人間的に成長したと思う。また、素晴らしい沖縄文化への知識を深めることができたと思う。このJETプログラムと県国際交流課のおかげで、私は忘れられない思い出がたくさんでき、この仕事を三年間したのは、とても恵まれていたと思う。また、いろいろな方々と出会ってアドバイザーや勇気をいただき、大変感謝している。



Diana Igei de Kinjo

ペルー出身の日系三世。1999年ペルー歯科大学卒業。沖縄と南米の県人会の交流のためにCIRになった。沖縄の文化についてとても関心があるので、日本とペルーの文化交流として、音楽や舞踊、言語、料理などを紹介して積極的に取り組んでいた。沖縄の食文化、習慣、芸術のほか、長寿などにも興味がある。大好きな料理は沖縄そば。

# 家族と歩む JETプログラム

—国際活動と国際的なJET家族—



福岡県福岡市教育委員会外国語指導助手

Sandra Duverneuil サンドラ・ドウバヌイ

私のJETプログラムでの経験は、私の家族の眼を通して日本を見ることができるといふ点において、ほかの同僚たちのそれとは全く異なっていると言える。昨年、私の夫は、私の決断—身の回りの物を整理し、メリーランドの家を売り払い、三歳の息子とやがて生まれてくる赤ちゃんと一緒にJETプログラムに参加すること—に賛同してくれた。

私たちは良いことも悪いことも家族とともに経験してきた。来日直後の一番の懸念というのは、私たちの長男、ニコラスのための良い託児所を探すことだった。ようやく家の近所に私立幼稚園を見つければ、ニコラスはその幼稚園に温かく迎えられた。もっとも、時にそれは彼が注目を一身に浴びてしまうという、あまりにも温かすぎるものであったが。

福岡市教育委員会との契約書には私の名前だけが記されていたが、私の家族全員で、「国際化」を押し進める役割を担うことになった。ここ福岡で私たちが学んだ最初の言葉は「かわいい——いっ!!」。なぜなら、私の息子の青い瞳と明るい茶色の髪を見たときに、人々が、まずそつ叫ぶからだ。二人の子どもは日本の社交場において、良い緩和剤となっている。

福岡市でのALTとしての活動は主に五つの異なる中学校を回って活動することである。私が訪れている五つの学校は、必ずしもすべてが同じレベルにあるという訳で

はない(日本人のすべてが中流階級という訳ではないのだ)。私は荒れたような学校に行くことを心配していたが、昨年のALTの先輩であるMeganからは心配する必要はないと聞き、実際、いくらレベルが低い学校の方が、より社会的であるし、英語を話すことについて物怖じしないのである。その上にまたより国際的であることも多く、時には素晴らしい英語を話す生徒がいりするのである。

Meganはまた、特別養護クラスでの経験がいかに価値のあるものであるかについて言及していた。私が活動をしている学校はそれぞれが養護クラスを持っており、そのクラスの生徒はまさに重度の障害を持つ生徒たちである。養護クラスの担任の先生方はそのクラスの生徒たちをまるで自分の子どものように扱い、私はより文化的な活動がより自由にできていると思う。

ある一つの学校は、私が養護クラスへ参加することの第一の目的は、ほかの文化圏からやって来た人々に生徒が直面することである、とあからさまに述べている。私はアメリカとフランスのお菓子の作り方を生徒たちに教えてきた。例えば、去年のクリスマスには、私たちは家庭科室に行き、クリスマスキャロルを聞きながら、クリスマスクッキーを作ったものだ。ほかの機会には私のフランスとのつながりを強調するために(私の夫はフランス人なのである)、日本でも人気のあるクレープを作った。



去年の秋、新任A.L.Tとして私は生徒と日本人の同僚たちに、アメリカの女性はたいてい、子どもを出産した後は仕事に復帰することを教えた。それぞれの学校の生徒たちは、私がもうすぐ子どもを産む予定があることを知るととても喜び、さらにまた、私が日本で産むつもりであることを知ると非常に驚いていた。私が帝王切開を受けたということにもかかわらず、私の家族は、日本での出産についてはとても好意的な経験をした。

アメリカでは、保険会社は病院の滞在期間を指定しており、女性は帝王切開を受けた後、二日か三日で病院から家へ帰される。日本では保険医療制度によって、女性は最大一週間まで病院に滞在することが認められ、まるでロイヤルファミリーのように扱われるのだ。私が病院に入院している間、病院のスタッフがどんなによく私の世話をしてくれたか！私ほとても彼らに感動させられた。彼らは毎日、その日の予定を英語版にして配ってくれたりもしたので。私の新し

い赤ちゃん、マックスと長男のニコラスは、夫とともに私の学校を訪れたことがある。ニコラスは今でも四歳になるのだが、日本語と英語、そ



してフランス語を話すことができる。四歳の子どもが三カ国語を話すことができるのを私の生徒が知ったとき、彼らにとって、英語を学ぶということはもっと身近なものになったのではないかと思う。

生徒たちにとって、一番大きな教訓は、「西洋人の父親たちは、子育てにおいて積極的に助け合うことが当然と思われている、ということではないだろうか。私はマックスが生まれて八週間後には職場復帰したのであるが、私が仕事に戻ったときからマックスが日本の託児所に行き始めるまでの間、夫がマックスの世話をしていたことを生徒たちが知ったとき、彼らは驚いていた。私たちの子どもそれぞれの学校と託児所を通して、私たちはしばしば地域社会の活動に出たりしている。去年、ニコラスの学校がJR列車記念乗車会に参加したとき、NHKのニュース番組の中で私の夫とニコラスはTVに出た。私の夫はまた、福

岡こくさい広場で催されていた居住外国人のための無料日本文化クラスの一つに参加をしていたとき、(書道クラスを楽しんでいたのだが)朝日新聞の記者にインタビューされた。

私たち家族は、日本で過ごした日々の素敵な思い出をたくさんつくるだろう。願わくは私たちは私たちそれぞれの国、アメリカとフランスの良い親善大使になれば良いと思う。

草の根レベルの国際化を国際的な家族の手で！



Sandra Duverneuil

アメリカ・ニューヨーク市生まれ、サウザンプトン(東ロングアイランド地区)で育ちカナダのモントリオール大学において言語学を専攻、同時に副専攻として東洋アジア学も学ぶ。来日前にニューヨーク州立大学(別名エンパイアステートカレッジ)で国際教育社会政策の修士号を取得。叔母の名付け親である祖父の親友が日系2世であったことから、日本への関心はこうした家族の絆から生じている。JETプログラムに参加以前は、ワシントンD.C.のビューロー・オブ・ナショナルアフェアで電気製品雑誌の編集局長として活躍していた。



## Diana Igei de Kinjo

comprender mucho más las costumbres locales, hasta el pensamiento de los japoneses, contribuyendo así en afianzar el concepto de "Internacionalización" en Okinawa.

Viviendo en Okinawa también aprendí a admirar mucho más su cultura. En especial el gran interés que tienen los niños y jóvenes de Okinawa por practicar desde muy temprana edad el tradicional baile de tambores llamado Eisa, sorprendiéndome muchísimo. A diferencia de ello, los jóvenes de Perú no tienen el mismo interés por su cultura, música o arte tradicional, ni siquiera en conocer sus raíces incaicas. Por el contrario están fascinados por la moda, el baile y la música del extranjero.

Recientemente, vino un periodista del extranjero para investigar sobre los longevos de Okinawa, pudiendo ir a acompañarlo como trabajo de CIR y visitar un grupo de ancianas que viven en la parte norte de Okinawa. Llegando a verlas y conversar con estas longevas entre 95 y 103 años de edad. Según la conversación ellos descansan y comen bien, notando además que hablan bastante y rien mucho. También me di cuenta que estas personas viven muy felices, rodeadas de la naturaleza y tienen buenas relaciones con los vecinos, quienes ven siempre por la salud de ellas. Recuerdo mucho a una anciana de 103 años con gran cansancio, haciendo muchas bromas.

Así como esta maravillosa experiencia hubo muchas más, que nunca olvidaré. Por ejemplo, otra actividad que me gustó mucho, fue el programa de intercambio JST (Tour de jóvenes

estudiantes). Todos los años en el mes de Julio, la prefectura invita durante 1 semana a jóvenes nikkei elegidos por las Asociaciones Okinawenses de cada país. El objetivo de este Tour es que conozcan la cultura e historia, las costumbres y refuercen sus raíces okinawenses, mientras intercambian con jóvenes okinawenses de su edad. Para que a su regreso puedan ampliar esta red Okinawense por todo el mundo. Realizan finalmente una estadía en casa de parientes okinawenses durante 3 días.

Mi rol en estos 3 años como CIR peruana, fue también hacer traducciones, visitar colegios, dar cursos de comida peruana, charlas, etc permitiéndome presentar la cultura, la historia, el idioma y las principales festividades de mi país.

Agradezco a las personas del Programa JET, a los miembros del Dpto. de Intercambio Internacional y a todos aquellos que me apoyaron y alentaron en todo momento para continuar en lo que fue para mí uno de los retos más importantes tanto en lo personal y laboral.

Al principio tuve muchos temores e inquietudes al venir a realizar este trabajo, ya que era un área diferente a mi especialidad, pero gracias a este fabuloso programa pude adquirir experiencias muy gratificantes, desarrollando mis habilidades en muchas otras áreas. Y a la vez logré profundizar mis conocimientos sobre esta maravillosa cultura okinawense.

## Sandra Duverneuil

cookies while listening to Christmas carols. On another occasion, we made crepes (popular in Japan) to emphasize my "French connection." (My husband is French).

Last fall, as an incoming ALT, I taught my students and Japanese colleagues that American women generally go back to work after having children. My students in each school were excited to find out I was expecting a baby and were really surprised to find out I intended to give birth in Japan. My family had a very positive experience with childbirth in Japan, despite the fact that I had a c-section.

Back home insurance companies dictate length of hospital stays. Women are sent home from the hospital two to three days after having a c-section. In Japan, the healthcare system allows women to stay up to a week in the hospital and they are treated like royalty. I was touched by how much the clinic's staff helped me during my stay. Each day, I was provided with an English 'schedule' of what to expect.

Our new baby, Max, and our son, Nicolas, have both visited my schools with my husband. Nicolas, now four years old, can speak Japanese, English, and French. When my

students realize that a four year old can speak three languages, it makes learning English more accessible to them.

I think the biggest lesson for my students was that "Western" fathers are expected to play an active role in parenting. They were surprised to find out my husband took care of Max after I returned to work (eight weeks after he was born) until recently, when Max started Japanese daycare.

Through our children's respective school and daycare, we are often out and about in the community. Last year, my husband and son appeared on TV in an NHK news program when Nicolas's school went on a JR commemorative train ride. My husband was also interviewed by Asahi newspaper when he attended one of the many free Japanese cultural classes offered to foreign residents in Fukuoka's Kokusai Hiroba (he enjoyed the calligraphy class).

Our family will have many fond memories of our time spent in Japan. Hopefully we have been good ambassadors for our respective countries, the U.S. and France.

Internationalization at the grassroots level, with an international family!



# Vivir en Okinawa

Okinawa, hermosa isla de playas color turquesa es realmente un lugar encantador. Y como centro turístico, el número de visitantes se ha venido incrementando, pudiendo verse turistas casi todo el año. En el año 2003, el número de turistas en Okinawa superó la cifra record de 5 millones de personas. Aparte, también Okinawa es llamada "Isla de Convenciones" por realizarse importantes eventos como la Reunión Cumbre de líderes Sumitto en el 2000, la Reunión de uchinanchus del mundo cada 4 años, la 46ava Asamblea General del BID programada para abril del 2005, entre otras. Okinawa también es conocida mundialmente por tener el índice más alto de longevidad. Existiendo actualmente 365 personas mayores de 100 años en toda la isla.

Vivir en Okinawa pequeña isla del sur, rodeada de acogedoras personas que aman la paz y la naturaleza, escuchando muchas veces la frase "Mensore"(bienvenidos) e "ichariba choudé" (al primer encuentro todos somos hermanos) me hizo reflexionar sobre la suerte de muchos extranjeros incluyéndome, viviendo en esta maravillosa isla. Soy peruana descendiente de okinawenses (tercera generación), crecí y estudié rodeada de compañeros peruanos. Y por mi identidad nikkei peruana, puedo decir que conozco de cerca el pensamiento criollo así como la honestidad del nikkei peruano.

Inicialmente al venir a Okinawa por tener el apellido y la cara uchinanchu creía que me habituaría rápidamente a la

vida de aquí, pero definitivamente eso no influyó, uno al nacer y crecer en el extranjero viene con una identidad y costumbres propias de su país, es por eso que al salir y vivir fuera uno debe estar predispuesto a adaptarse al nuevo lugar, aprendiendo las costumbres locales y respetando las reglas establecidas, para así vivir en armonía con la gente que lo rodea. Sería oportuno mencionar esta frase "A donde fueras haz lo que vieras".

Para mí, al empezar a hacer mi vida en Okinawa, lo que más me tomó tiempo en acostumbrarme, aparte del idioma fue la separación de basura. En Perú no existe esa costumbre, toda la basura se bota junta (quemable y no quemable). Como era tan fácil botarla no tuve la oportunidad de profundizar este problema, sobre el control y la contaminación que produce al medio ambiente. Estando en Japón necesité mucho tiempo para acostumbrarme a separar la basura y gracias a la explicación de colegas y familiares, pude entender sobre la importancia de este tema.

Y es que, si llega la oportunidad de que un extranjero se mude cerca de su casa, trate de comprender el gran esfuerzo que hace al vivir en otro país, con costumbres y reglas diferentes. Comparta una agradable conversación y conozca esas diferencias comparándolas con su país. Seguramente se quedará muy sorprendido al escucharlo. Además si tiene la oportunidad trate de dar consejos, para que ambos puedan

## JETting with Family —Internationalization and the International JET Family

My JET programme experience is quite different from my colleagues'—a view of Japan through the lens of my family. Last year, my husband supported my decision to pack up our belongings, sell our house in suburban Maryland (USA) and join the JET programme—with our three year old son, Nicolas, and a baby-to-be.

We have had our ups and downs experiencing Japan as a family. My main concern when we first arrived was finding a suitable daycare situation for our older son, Nicolas. We finally found a private kindergarten close to home. Nicolas was warmly welcomed by the school, sometimes a little too warmly as he was often the center of attention.

Although my contract with Fukuoka City Board of Education only states my name, my entire family works on a daily basis in the name of "internationalization." The first expression my family learned in Fukuoka was "ka-wai-iiii!" (cute) when people notice our sons' blue eyes and light brown hair. Both children are a good icebreaker in social situations in Japan.

My job as an ALT in Fukuoka City consists of rotating

between five different junior high schools. The schools where I teach vary in socio-economic level (not all of Japan is middle class). I was worried about getting inner city schools. Megan, one of my senpai last year, said not to worry, I would probably enjoy the lower level schools more. She was right; the students in my lower level schools are more outgoing and not as shy about speaking English. Often they are more international (in Fukuoka) as well, so there are sometimes random students who speak excellent English.

Megan also had spoken about the rewarding experiences with the Special Education classes. At each school I visit, the students in these classes truly are special. I have great admiration for their teachers who treat the students as if they were their own children. In my Special Ed classes, I generally have more freedom to do more "cultural" activities.

One of my schools explicitly told me that the primary purpose of my visits to the Special Ed class is to expose the students to people from other cultures. I have taught them how to cook American and French treats. Last Christmas, for example, we went to the Home Economics room and made Christmas